地域で活かされる
長崎大学の
知
Knowledge of Nagasaki University
Vol.10

子どもの貧困問題を地域に根ざして考えていきたい

子ども食堂の勉強会が長崎大学で開催

昨年十二月三日、長崎大学文教スカイホールで、あるイベントが開催されました。「広がれ、こども食堂の輪！全国ツアーin長崎」です。近年話題になっている子ども食堂を実際に運営している人や関心を持つ人が一堂に会した交流会で、その中心となっている長崎子ども食堂ネットワークの代表を長崎大学教育学部の小西祐馬准教授が務めています。お話を伺いました。

「子ども食堂はここ数年広がりを見せています。立ち上げ当初は貧困の状況にある子どもに食事を提供しようという活動でしたが、今では貧困ということに限らずさまざまな子どもを迎え入れており、食事、遊び、勉強、相談などの要素が加わっています。つまり広くいえば『子どもの居場所づくり』が目指されているのです。皆さん自己資金や寄付で運営しており、長崎県内にも十五カ所以上できました。やってみたいという人も多く、イベントは情報交換の場になりました」。

小西先生の専門は子どもの貧困問題です。関連著書も七冊あり、新聞、テレビ、ラジオに数多く登場しています。

「二〇一五年五月にはNHKの九州ネットの報道番組で二週連続スタジオ出演しました。九州でこの問題を専門とする研究者がおらず声をかけられたのだと思います。いろいろな方が見られたようで、この頃から九州でもせきを切ったよう関心が高まり始めました。九州の皆さんは大変熱心です。土地柄でしょうか」。

そもそも、先生はなぜ子どもの貧困問題に取り組むことになったのでしょう。

「きっかけは小学生の頃、クラスに貧乏な子どもがいたことです。同じ班の女の子で、いじめられていました。それから『何かおかしい、間違っている』と経済的な問題が気になり始めて、高校生になってからは生活保護や貧困に関する本を読んで少しずつこのテーマに興味を深めていきました。北海道大学に入って貧困問題の研究をしている指導教官の下に付き、生活保護世帯の聞き取り調査や路上生活者の調査も行いました。そのうち縁があって専門書を出す機会をいただき、今に至ります。長崎大学に着任後、長崎市内で保育所を利用する保護者へのアンケート調査を行いました」。

質問項目が興味深いですね。例えば、「食後に果物を食べますか?」。

「果物は高いのです。食習慣は経済状況と深く関連します。しかしこのアンケートには限界がありました。質問項目が多くて回答に時間がかかることもあり、回答してくれた層は比較的子育てに熱心な方々。それよりも回答されなかった方々の状況を把握する必要があります。今はインタビュー調査を行っています。貧困研究においては量的調査が非常に重要です。例えば今、子どもの貧困率は十三・九パーセントといってもピンと来ませんよね。貧困率は国民生活基礎調査で出てきた世帯収入の中央値を出し、その半分以下を貧困層として、そこで暮らす子どもの割合を出すものですが、現状を把握するための一つの目安にすぎません。所得が高くても借金がある、医療費がかかる、所得が少なくても貯金があるなどケースはそれぞれで、一人一人の生活を丁寧に拾っていくことが肝要です。デリケートな問題ですから気を遣いながら聞き取りをしますが、母子家庭のお母さんのお話を聞いていると、本当によくやっているなぁというのが実感です。子どもを大学に行かせるなんて夢のまた夢といいます。そもそも貧困家庭の子どもは机も本もなく、勉強する意味が実感できないこともあります。努力する習慣さえ奪われるのが貧困の本質です。虐待やいじめ、不登校問題を考える際、底では貧困とつながっているかもしれないという視点が重要です。教育費の無償化だけでなく、教育環境を整えるなど、根本的な施策が必要です」。

子どもの可能性は無限大、とはいえない実態ですね。

「広がれ、こども食堂の輪!全国ツアーin長崎」が行われた文教スカイホールは、ほぼ満席近く埋まりました。場内はこれから子ども食堂を始めたいという方、何か手伝いたいという調理師グループ、行政関係者など多くが詰め掛けました。

分科会のメインスピーカーとして子どもの貧困の事例について発表する小西先生。このほか、実際に子ども食堂を運営している方によるノウハウも提供されました。

イベントでは法政大学教授で社会運動家の湯浅誠さんも登壇しました。小西先生は学生時代から湯浅さんと親交があるのだそうです。

研究成果を実践につなげるフットワークの良さも大切

子ども食堂の盛り上がりなどで、学齢期の子どもの貧困には少しずつ社会の目が向けられています。今後の調査研究はどのようなことに注視していきますか?

「今、注目しているのは乳児期から幼児期までの生活で、この時期の子どもを貧困という視点からアプローチしている研究はまだ少ないのです。赤ちゃんは安全で安心できる環境で育てられなければならず、どのような養育環境なのかが重要です。実態調査をもっと深めていきたいですね」。

一連の研究や調査にはゼミの学生たちも参加します。子ども食堂を卒業論文のテーマに選ぶ学生もいれば、自主的に里親支援サークルを立ち上げる学生もおり、頼もしい動きも出始めました。研究成果は社会に役立つことで生きるものです。小西先生のように成果を実践につなげるフットワークの良い研究者が、長崎大学の個性の一つである「現場に強い」を体現しているのです。

小西祐馬　准教授　Yuma KONISHI

北海道出身。北海道大学教育学部、同大学大学院修士課程・博士後期課程を経て、二〇〇八年より長崎大学教育学部准教授。専門は児童福祉。「子どもの貧困」について研究している。著書に「貧困と保育」（編著、かもがわ出版）、「子どもの貧困」、「貧困と学力」、「子どもの貧困白書」「現代日本の「見えない」貧困」（いずれも共著、明石書店）などがある。

先生の著書の一例。特に2016年に出版した「貧困と保育」は保育から貧困を考える初めての切り口で、保育業界で話題になりました。